＜十全な話者＞とは誰か：オクシタン語バイリンガル教育の挑戦

　フランスには、憲法第2条において「共和国の言語」とされたフランス語以外に、憲法第75条付則1において「フランスの文化遺産に属する」とされた数々の地域諸言語がある。

　フランスの地域諸言語は、現在そのほとんどが消滅の危機に瀕する言語に位置づけられている。それは、特に19世紀後半以降、フランスが国語としてのフランス語を教育・メディア・経済活動などにおいて占有的に使用する中で、多くの人びとがより通用範囲の狭い継承言語を捨てて、フランス語へと「言語とり替え（Language Shift）」を行い、若い母語話者が失われたことによるとみなされている。しかし特に第二次世界大戦後に、このようなことばが消滅していくことへの危機感が生まれ、「言語とり替えを巻き返す（Reversing Language Shift、以下 RLS）」（Fishman 1991）ために、話者たちによってさまざまな試みが行われるようになった。

　その中で、フランスにおけるバスク語政策の決定・実施を担う公的機関として2004年に設立された「公立バスク語局（Euskararen Erakunde Publikoa / Office Publique de la Langue Basque）」は、2006年にその言語政策プロジェクトを、簡潔な銘句の形「目的の中核：十全な話者（locuteurs complets）、ターゲットの中心：若い世代」で提示した[[1]](#footnote-1)。ここで提示される「十全な話者」とは、「動機と知識、使用の面で十分なレベルに達していること」「あらゆる状況でバスク語でコミュニケーションしたいという欲望を持ち、そのために必要な能力を有し、それを効果的に使用しようと決意すること」によって定義されるとしている（Office publique de la langue basque, 2006, p. 8）。

　家庭内での世代間伝達が困難になっていた地域諸言語の保護・維持活動の中心は、幼少期から言語を習得させるための手段としての、当該言語の学校教育への導入であった。

学校教育だけでは「母語話者」を育成することはできない、と早くから指摘されてはいたが、これらの教育運動はすでに一世代以上にわたって続けられている。そして現在、すでに教える側の世代も「母語話者」ではなくなっている中で、地域言語にとっての「十全な話者」とは誰なのかを問うことは、近代に確立された「言語」像、そしてその「話者」像そのものをも問い直す契機となっているように思われる。

　本発表では、フランスの地域言語の一つである「オクシタン語[[2]](#footnote-2)」の教育、特に公立学校の枠組みとは異なる場で提供されている、オクシタン語によるイマージョン教育を行うカランドレート（Calandreta）という教育組織（association)に焦点を当てる。カランドレートはオクシタン語のイマージョン教育とその独自の教育法で注目を集め、現在南仏各地に62の幼稚園・小学校と3つの中学校、3000人以上の生徒と200人以上の教員、そして独自の教員養成システムを持つに至っている。教員がオクシタン語によって教育することがカランドレートの大きな特徴であるが、そのための教員のリクルートと養成が最重要課題の一つとなっている。

　本発表では、まずアメリカの社会言語学者フィッシュマンが提唱したRLS研究と、そこで前提とされる近代的言語観について確認する。次に、オクシタン語イマージョン教育「カランドレート」の歴史、その教育システムについて紹介する。そして、カランドレート独自の教員養成センターであるアプレーネセンター（APRENE）に2015年度に入学した教育実習生10名へのインタビュー調査を通して、「オクシタン語」という危機言語の状況、そしてそこから見いだされる＜十全な話者＞像について考察したい。

1. フランスの諸言語

2. Reversing Language Shift研究とその言語観

3. 運動としてのRLS：オクシタン語イマージョン教育「カランドレート」の展開

4. オクシタン語イマージョン教育の教員養成：教育実習生へのインタビュー

5. おわりに：＜十全な話者＞とは誰か

1. 公立バスク語局HP, <http://www.mintzaira.fr/fr/politique-linguistique.html>, 2018年7月20日取得 [↑](#footnote-ref-1)
2. 本発表において中心的なテーマとなる「オクシタン語（l’occitan, la langue occitane）」は、その言語の名称すら定かではない状態がずっと続いている。「パトワ」「プロヴァンス語」「リムーザン語」「オック語（langue d’oc）」などいくつかの候補はあるが、本稿では「南仏全体で話されている一つの＜言語＞」を全体として指し示す名称として特に20世紀初頭から提唱され、現在は南フランスの中心部〜西部にかけて特によく使用され、カランドレートが採用している名称である「オクシタン語」を使用する。 [↑](#footnote-ref-2)